小論文（日本語の課題）　**※小論文（日本語の課題）の解答用紙に記入してください。**

次の【課題文】を読んで、そのあとの【問い】に答えてください。（600 字以内）

【課題文】

「咳をしても一人」――このとき、放哉〔尾崎放哉（ほうさい）、自由律俳句の俳人〕の脳裏に浮かぶ人の顔は数知れぬほどであっただろう。

自分の顔を自分の眼そのもので見ることはできない。

しかし、自分の顔をいやというほど思い知らされることはある。自分が傷つけた相手を前にしたときである。自分を恨む目つき、憎しみにゆがむ唇を目にしたとき、その人の前にある自分の顔を無しにはできない。また、自分を憐れむ人を前にしたときもそうであろう。消えてしまいたくなる我が身を消せずとも、うつむきうなだれるしか自分の顔のもって行き場はない。

たとえ自分の顔を見ていなくても、自分の顔に安堵できるときもある。自分を見つめる相手がやわらかな表情でいるときに、自分の顔を隠す必要はない。自分の顔も、相手と同じように、相手に心安らぐ光を発しているに違いないからだ。

一人、この自分を知るのは、この自分に向けられる様々な人の顔によってしか、その道筋はない。

（出典）西川勝『「一人」のうらに』サウダージ・ブックス、2013 年、83～84 頁。

（注）一部の読点を句点に改めた。

【問い】

この課題文の著者は、「自分の顔を自分の眼そのもので見ることはできない」にも関わらず、「自分の顔をいやというほど思い知らされ」たり、「たとえ自分の顔を見ていなくても、自分の顔に安堵できるときもある」、と述べています。

こうした「自分の顔を思い知らされる」あるいは「自分の顔に安堵できる」とは、どういうことでしょうか。具体例を挙げて説明したうえで、あなたなりの結論を述べてください。